

# 子ども食堂篇

## 転機

馬渡 徳子

くして、我が子ども食堂は、昨年のうちに五回の地元ニュースや新聞報道、県内全小中高校への配布季刊誌などに取り上げられる機会があったことが影響し、毎回 80 名を超える参加者となりました。保護者とともに参加される方も急増しました。

そのことで、四つの部屋が常に満員状態となり、自分時間でゆっくりと食事取ることや、好きな場所で勉強したり、ゲームやパソコンをしたり、友だちと話したり、保護者同士で交流したりという時間をもつことが難しくなりました。せかされるように食事したら、直ぐに帰宅される方が増えてきました。

ずっと何年も通っている子どもたちや、学校など子どもの公的支援機関から紹介を受けた子どもたちは、ガラッと変わってしまった雰囲気になじめず、一月末にスタッフに率直な気持ちを伝えてくれました。

「ずっとここは自分のいこごちのよい居場所だと思ってきた。けれど、ボランティアの方と勉強している横で平気で大声でふざけたり、食器もいつ

までも戻さないでゴミのままに帰ろうとする人やそれを見過ごす保護者の方もいて、悲しくなる。新しい人を拒否する気持ちはないけれど、前のようにお互いがどんな状況かは知らなくても、その場の様子を観て譲りあったり、基本的なルールを守りあえる居場所に戻したい。」

その発言を受けて、一月の運営会議において、当面の間の新規受け入れを中止しました。また、子どもたちと保護者に現状への思いを伺い、子どもたちには大学生と一緒に、一か月かけて「ルール」をつくってもらうことになりました。

転機を迎えた我が無料塾と子ども食堂。

子どもたちの参画のもとに、次の一步を踏み出す時が来ています。

次回 6 月の投稿時には、自分たちの居場所のルールをどのように子どもたちが大学生とともにつくったのか、ご報告したいと思います。